

第73期生の卒業を祝し、未来の健闘を祈る！



☆ 本日7日(土)、東成瀬中学校卒業証書授与式が挙行政され、第73期卒業生として、15名が学び舎を巣立ちました。午前10時から始まった卒業式は、新型コロナウイルス感染症拡大を防ぐため、卒業生と教職員だけの出席となりました。3年生1番の佐々木蓮くんが卒業生番号5832号なので、以下14名の名をつらね、5846号に達します。義務教育9年間を終えて、真の個性発現のための旅立ち、誠におめでとうございます。

校長式辞

春の息吹が感じられる今日この頃であります。世界的に流行している、新型コロナウイルスの感染対策ということで、国や県からの要請を受け、卒業生の皆さんと教職員のみ、規模を縮小しての卒業式になりました。本来であれば、保護者の皆様をはじめ、多数のご来賓の皆様のご臨席を賜り、大勢の方々に見守られ、祝福されるどころ、たいへん心を痛くしております。ただ、皆さんの一番近くで、これまで支え、応援してくれた、加賀友範先生をはじめ、多くの先生方が、皆さんの立派な姿を見守り、祝福しています。安心してください。

15名の卒業生の皆さん、本日の卒業おめでとうございます。心からお祝い申し上げます。卒業生の皆さんと私が出会ってから、わずか2年という短いものではありませんが、私の話には時には笑い、時には真剣につきあってくれました。今日が最後となります。

皆さんの新しい門出に当たり、ある女性の体験談を紹介して、贈る言葉にしたいと思えます。その女性がまだ小学生だった頃、学芸会で「アリババと40人の盗賊」という劇をやることになりました。彼女は準主役のモルジアナに選ばれ、大変喜びました。うれしくて張り切って一生懸命練習しました。ところが、本番の少し前に、その役から降ろされてしまったのです。彼女の元気いっぱいの演技が、「思慮深く、控えめなモルジアナにふさわしくない」と先生は言ったそうです。その代わりに道化の役に回りました。最後にほんのちょっと出てきて、みんなを笑わせる道化です。なくてもいいんじゃないかと思うような役です。彼女は悲しくて悔しくて、家に帰って母親に訴えました。母親は黙って娘の話を聞いて、何も言いませんでした。

数日後、朝起きると枕元に色鮮やかな道化の衣装が置いてありました。彼女は複雑な気持ちだったそうです。「モルジアナをやるはずだったのに」という気持ちをまだ引きずっていたからです。その衣装は裁縫が苦手だった母親が、知人に頼んで、急いで縫ってもらったものでした。母親は彼女に言いました。

「必要のない役なんてありません。あなたは自分に与えられた役を一生懸命にやりなさい。」どんな人にも役割がある。どんな小さな役割にも大切な意味がある。そのことに誇りを持つように、ということをお母さんは娘に伝えたかったのだと思います。

それからは、どんな小さな役割でも、誇りを持って一生懸命取り組むようになったそうです。そして、彼女はこう言っています。「この歳になっても、『これでいいのだろうか?』と不安になることだってある。そんなときは、不安になる自分をまずはありのまま受け止めるのだ。そして、自信のあるふりをする。たとえ、不安でも、自信がなくても、『やれます。やります!』と言って引き受けるのだ。一生懸命やっているうちに、『ふり』だった自信がいつの間にか本当の自信に変わっているのである。」と。彼女の話は、これからの時代を生きる私たちに大きな示唆を与えてくれています。

現代社会は、そしてこれからの社会は、ますます不透明で、情報で大混乱するそんな社会になるかもしれない。どこまでも不完全で、こんなにも大勢の人間が行き交う世の中で、今さら自分に一体何ができるだろうかと無力感にさいなまれることもあると思います。しかし、必要のない人間なんてこの世の中にはいないのです。どんな人間にも大切な役割があります。どんな小さなことにも、自分の役割というものがあるはず。それを精一杯果たそうとする自分を愛し、自分に誇りを持ってほしいというのが私の願いです。それこそが、この世で生きるということだと思っています。

「自分を愛し、自分に誇りをもつ」この言葉を皆さんに贈り、式辞といたします。